

みなせ河ありてゆく水なくばこそつひに我身をたえぬと思は

是は疎くはなつたもの、猶折々音信などがあるをいうたものである。我身を絶ゆるは人が我を絶ゆるで、即ち我を忘れるぢや。身を絶ゆに水脈絶ゆをかけたのぢや。○水無瀬川の下に通つて行く水が全くなくなる上は、とうとう我身を絶えてしまふ事とも思ふべきぢやが、通うてをる限りは、絶えたとはいはれぬ。

み つ ね

よしの河よしや人こそつらからめ早くいひてしことは忘れじ

「よしの川はよしやの枕」さて其縁語ではやくといふのぢや。はやくいひてしは誓ひなどしたること、唯語らうたまでの詞ではない。今はつらくもなつたにせよ、以前誓ひたる詞は忘れぬとぢや。○吉野川のよしとへ人は今日同情なくつらく我にあたるにもせよ、前かた言ひちかひおいた詞をば、わしは決して忘れる事はあらず。

よみ人しらす

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける

世の中の人と廣くいうてさて我思ふ人を其うちにくめていうたぢや。「花ぞめは、月草の花で染めたもので藍色ぢや。今花色といふもこれからでたもので、花染は殊に色の變じやすいのぢや。○世間の人の心といふものは、あの花染の色のやうに、いかにもうつろひ變じやすい色でサあるわい。」

心こそうたてにくけれ染めざらばうつろふ事もしからまし

染めるは此歌では心を染めるで、即ち人の心を深く思ひ入るにいふ。うつろふは變ずるで人の心が變ずるぢや。○わしが此心がサけしからず惜いことであるわい。わしの心が深く人を思ひ入らざつたならば、人の心が變るといふことも惜しいとは思ふまいのに、つまりわしが心からかやうにうくもつらくも思ふ事であるからサ。

こ ま ち

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

○すべての物は色が有てさつろひ變るといふもあるのであるが色が見えなくうつろひ變るものは只一つ世間の人の心の花即ち鳥渡見の様子のよい氣さきの花でありますわい。

よみ人しらず

我のみやよをうぐひすとなきわびむ人の心の花とちりなば

「我のみやののみは人に對して我をいふ辭で俗にわしひとりといふ程の詞二三の句は世を愛くなさけないものと恨みなげかんといふを驚となくといひかけて下の花とちるに應じたのちや ○わしひとりが世の中を愛いもの即ち驚となきなげきてつまらず思ふ事でもあらう頼む人の心がかはつて花とうつろひちる事であらうならば、

そせい法師

思ふともかれなむ人をいかせむあかずちりぬる花とこそ見

め

○何と思うたとして遠のいてしまふ人をばどうしやうもない見足らずまた飽かないに散てしまふ花とサ見る外はない。

よみ人しらず

今はとて君がかれなば我宿の花をばひとり見てやしのばむ

是は歌がらについて思ふに只かれがたになつたばかりのものではないらしい女の歌で男がさる家へ聲どりなどせらるゝ事となつた時よんだものらしくいかにもあはれの歌ぢや○今はというて君が通ひ來ぬやうになつたらば是まで常にもろともにながめて賞翫せしわしの家の花をば今からは唯一人でながめて共に見し時の事を考へしのふ事でもあらうか、

むねゆきの朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人の心に霜はおかなむ

霜にはすべての草が枯れるものぢやからそれに依ていふので○人がわしを忘れる忘草が枯れるかもしれぬから同情のない人の心の上に霜が置やうにしたい(霜で忘草が枯れたなら又もとのやうになるであらうから)

寛平御時御屏風に歌かよせ給ひける時よみてかきける

そせいほうし

忘草何をか種と思ひしはつれなき人の心なりけり

○忘草といふものは何を種としてはえるかと思ふたがそれは同情のない人の心が種となるのであつたわい。

題しらず

秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらむ

「秋の田のいねといはん枕 いねは稲に去ねをかけ さてかけうしかる皆稲の縁語ぢや 稲にいふは懸け、生刈るぢや、○秋の田の去ねと人に我より言葉をかけた事もないのに、何事を憂くおもしろからずとして、人が離れ遠のく事であらう。」

きのつらゆき

初雁のなきこそ渡れよの中の人の心の秋しうければ

「初雁のはなきこそ渡れの枕 初雁は秋のものぢやから其縁語で秋しうければといふ 是もひろくよの中の人というて、我思ふ人をも其中にこめたのぢや ○初雁のなき渡るやうに、わしは常にないてくらすといふは世間の人の心が飽きつばくさみしいのがサうくつらいからさ。」

よみ人しらず

哀ともうしとも物を思ふ時などか涙のいとなかるらむ

哀とは何事に依らずすべて廣く心に感ずる事 うしは憂くなげかしき事いとなきは、いそがしくせはしいこと、いとまなしといふではない いそがしいと、いとまなしとは似ては居るが差別がある さて其いとなかるらむに、最流るらんをかけたのぢや、○あはれぢやとも又は愛いつらいとも物に感じて考へる時、何としてか涙といふものが、いそがしくせはしく甚しく流れ出る事であらう(わからぬ事ぢや)

身をうしと思ふにきえぬものなればかくてもへぬるよにこそありけれ

四四四
○死なん程に身をうくつらく思ふ事なれど、さればとて又消え失せ即ち死にもせぬ物であるからして、かやうにマアういつらいと思ひながらならへて居るよの中でサあるわい。

典侍藤原直子朝臣

あまのかる藻にすむ虫の我からとねをこそなかめ世をば恨み

「われからは小鰈の如き小虫で海布などにつく虫の名ぢやといふ、これを説文によりて魚ぢやといふ説もあるが従はれない 初二は我からの詞をおこす序で、これも何か因る所があらうが今はしられない 借虫の名のわれからにかけて、うきもつらきも皆我身から取るとの事をいうたぢや、ねをこそなかめは、われからとの句につけて見るので自身をとがむるのぢや、○蟹が刈り取る藻にすんで居る虫の名をわれからといふが、其名のやうに人のういもつらいもつまり皆我身から作り出した結果ぢやと身をとがめて泣く外はない 決して世間を恨み人を恨むべき筋ではない、といふので前

の初雁のより此歌までの四首は戀よりはむしろ雜に入るべき歌で、殊に此歌などは、反求の徳を示すものとして、修身書に引用してよいものである。

いなば

あひ見ぬもうきも我身のから衣思ひしらずもとくる紐哉

我身からといふを唐衣といひかけたので、唐衣といふから紐とつけたのぢや、下紐の解けるは人に逢ふべき前兆といふ事當時いはれて居る事ぢや、○人がわたしを逢ひみぬのも、又うくつらくわたるのもつまり我身から取る事であるのだから衣の、それをさうとも思ひしらないでマア下紐の解けることかいな(どんなに解けたとて逢はれるものか)

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

すがのよたおん

つれなきを今はこひじと思へども心よわくもおつるなみだか

○同情がない事ぢやからもはや戀ふる事はせまいと思ふけれども、とかく心よわくマア涙がこぼれおちる事かいナ、

題しらず

四四六

伊

勢

人しれずたえなましかば侘びつゝもなき名ぞとだにいはまし物を

○世間の人にしられない中で絶える事ならば迷惑ながらももし問ふ人が有つた時にはなき名であるかの人とははじめから他人ぢやとでもいひまぎらさうものを人にしられた中故さうもいはれぬ

よみ人しらず

それをだに思ふ事として我宿をみきとないひそ人のきかくに

是は前の歌とは反対で人しれぬ中の絶えたる時の歌ぢや 但し歌の上では絶ゆる事は見えない只忍ぶ丈の事ぢやが前後皆絶ゆる戀の歌ぢやからさやうに見るのぢや「おもふことゝては人の疑はしく思ふべき事とてぢやさかくはきくといふ事」○それ程だけの事でも人の疑ひ思ふべき事ぢやとしてわしの家を見たとはいひなさるな人の耳をとめてきくかもしらんから逢ふ事のもはら絶えぬる時にこそ人の戀しき事もしりけれ

「もはらは即ち專の字の意で一向にぢや 伊勢物語にもはらあふ事もせでとあるもはらに同じ 人の戀しき事は人の戀しいといふ真味はの意 常に逢ひし時も戀しと思はざるではなかりしがしかし真に戀しといふ事はの意ぢや ○逢ふといふ事が一向に絶えてしまつた時に至つてサ初めて人の戀しいといふ真味をば悟つた事であるわい、

侘びはつる時さへ物の悲しきはいづこをしのぶ涙なるらむ

「わびはつる侘び切つてしまふといふのぢやから即ち中の絶える時ぢや 物の悲しきは其絶ゆるのが悲しいといふのぢや ○侘び切つてしまつて縁が切れる時でさへも其縁が切れる事の悲しく思はれるはどこになつかしく戀しい所が有てそれを考へての涙であらう、どこにもなつかしく戀しく考へる所はない人ぢやのに」

藤原、おきかせ

恨みてもなきてもいはむかたぞなき鏡にみゆる影ならずして
是は忍びたる中が絶えた歌ぢや 「言はむかたぞなき」といふに絶えたる意が

みえて味があるのぢや　もとより忍ぶ中ぢやから恨んでも泣いても人には
言ふ事はならず思ふ人は絶えたのぢやから鏡のわが影より外には言ふ事が
出来ぬぢや　○恨んでも又泣いてもさて誰にもいはんやうがサない事ぢや
鏡にうつりて見えるわしの影の外には、あゝマアなんとしやう)

よみ人しらす

夕されば人なき床を打拂ひなげかむためとなれる我身か

夕さればの句中に毎夕々々といふ意がこもる　人なき床をば思ひ人の通ふ
時分は其人のために拂ひたる床を今はわが一人のためにぢや　下の句はか
かるなけきをせん爲にとて生れ來たる身かと問ひかけなげくのぢや　今も
苦境に陥りたる人が其身をなげいて、わしはかやうな苦勞をせん爲に生れて
來たかしらぬなど常にいふ事ぢや　切なる情の動く時もとより前後の事を
顧みるいとまなく、其當下の情を其儘に歌ひ出すが歌ぢや　○毎日々々夕方
になれば、人が來るでもない床を掃除して、一人で淋しく打臥し歎きあかす事
ぢやがさてくはかない事ぢやわしはかやうな歎きをせんためにとて、此世

に生れて來た事か、

わたつみのわが身こす波立かへり蟹のすむてふうらみつる哉

わが身こす波は正義に身をこすとはおのれより後なる者の前にすゝむをい
ふ　即ち後なる人に思ひかへられたるにて俗にます花に移るといふものと
あるがよろしい　立かへりは波の縁語　蟹のすむてふはうらみといはん爲
におき　又初句をわたつみとして波といふについけ一首すべて海邊の詞
でしたたのぢや　○あのわたつみのわが身こす波のために、わたしは忘ら
れてすてられた事ぢやが　立かへつて考へて見ても蟹が住んで居るといふ
浦見でなくうらめしくおもはれる事かいな、

め　あらを田をあらすきかへしかへしても人の心を見てこそやま

あらすきははじめにすきかへすで即ちあらをなしぢや　あらをなしをして、
又うちかへしくするが、あらすきかへしかへすぢや　これをかへすがへす
といふ序としたのぢや　下の句は絶えは絶えても猶かへすくよく人の心

を見定めて、さて後全く思ひ絶ゆともいかにともせんといふのぢや。○荒小田
をかへすに、先づあらごなしをして、さて幾たびもかへし、くするやうに、かへ
す、人の心をとくと見定めて、さて全くかうと見すゑてこそやめるならや
めやう。

ありそ海の濱のまさごと頼めしは忘るゝ事の數にぞありける

濱の眞砂と頼めしとは濱の眞砂の數はよみ盡すとも、我中は變るまじと頼ま
せたりとの事ぢや。忘るゝ事の數とはさまゝ契りおきたる事が、ことゝ
く變するをいふのぢや。○荒磯海の濱の眞砂はたとへよみ盡すともと頼ま
せおいたのは、そうではなく、忘れる事の數をいうたことであつたわい。

あしべより雲井をさしてゆく雁のいや遠ざかる我身かなしも

上の句は、いやとはさがるの序ぢや。すべて此序は、其時の景物とか、又は其事
にあづかるとかいふものに依ることは、追々お話し申す通り、其明かにわ
かる事は、お話し申す。又前の荒小田をの歌や、此歌のやうに、其由る所のわか
らぬものは、別にお話し申さぬが依る所のあるもので、只空に設けていふもの

ではないのである。○若原から立つて遙かなる空をさしてとんで行く雁の
やうに、段々と遠のいて思ふ人が來ぬやうになつてゆくわしが身があゝ悲し
い事ぢやマア、

しぐれつゝもみづるよりも言の葉の心の秋にあふぞわびしき

言の葉の心の秋にあふとは、人の心が變つて前にいひおきたる詞が偽となる
をいふ。言の葉といふから木の葉によそへて秋が來れば、木の葉が變じて散
るものぢやから秋にあふといふのぢや。○しぐれつゝして木の葉がもみぢ
する時分は何となく侘しくつまらないやうな心地のするものぢやが、それ
よりも今一層人が契りおいた言の葉が、其心に飽がきて、變つてゆくが、猶更
にわびしい事ぢや。

秋風の吹きと吹きぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

是は紫の一もと故に武藏野の草はみながらわはれとぞみるといふ歌を下に
ふみてよんだものと舊説ぢや。吹きと吹きぬるは、強く吹くこと。それを心
變りの強さによそへていふ。なべて草葉のは、我身のみならず、我がゆかりま

でも、意をよせたのぢや。○秋風がつよく吹き立つた武蔵野は、すべての草葉の色が俄に變りて見えることであるわい。

小町

秋風にあふたのみこそ悲しけれわがみ空しくなりぬと思へば

「秋風は野分の類の稻を害するあらし風それに人の心の變るをよせていふたのみは田の實に頼みかけたのぢや」「わがみ空しくは風のために秋實が空しくなるといふに、自身がはかなくなるをかけたぢや。田の實といひて、又實といふは重複するやうに見えるが、我身といふにかけていふのぢやから仔細はない。○秋風に出合ふたのみは、誠まことに悲しくわはれなものであるわい、其實が、むだにつまらぬものとなつてしまふ事ぢやと思はれるからサ

平貞文

秋風の吹きうらがへす葛の葉のうらみても猶恨めしき哉

上の句はうらみといふにかゝる序で、それに心の變るを秋風によせたのぢや又うらみても猶うらめしきといふも、葛の葉の風にかへるさまも、切うて面白

いぢや。うらがへすというて、又うらみといふは、うらか重複するやうぢやが、是も恨みといふにかけたのぢやから仔細はない。○秋の風が吹き立つて吹さうらがへす葛の葉のやうにうらみをいうても、やつぱりうらめしい種はつきない事かいナ、

よみ人しらず

秋といへばよそにぞきしあだ人の我を古せる名にこそありけれ

「あだ人はあだくしき人で、今いふうはきの人」「ふるせるはすてるので、今いふ閑却する事ぢや。○秋といふ名をば、只一般のよそ事とばかりサ聞いて居たがよそことではない、あのうはきの人が、わたしをすて、閑却する名でサ有つた事であるわい、

忘らるゝ身を宇治橋の中絶えて人も通はぬ年ぞへにける

又はこなたかなたに人もかよはず

忘らるゝ身をうしといふを、宇治橋とかけ、宇治橋といふより、中絶えてとい

うて橋の絶えると、中の絶えるとに用ひ 猶人も通はぬとらけて橋と戀との
両方にかけてのぢや 人も通はぬは使がこぬといふではない、其人が來ぬの
ぢや、即ち中絶えたのぢや 借此宇治橋の絶えたといふ事古記には所見がな
いが、しかしかやうにもよまれた事ぢやから絶えた事が有つた事ぢやらうと
正義にあるは、従ふべき説である ○忘れて捨てられるわしが身を、うく悲し
く思ひ、宇治橋の如く、中が絶えて、一向に人の通ふといふ事もなくて、年頃にも
サ成た事であるわい、さて又右にある古注は例のとるに足らぬものぢや、

阪上これのり

逢事をながらの橋のながらへて戀渡るまに年ぞへにける

前の歌に絶え果てたるものをあげ、こゝからは又やうくもどりと逢ひがた
き意の歌をのせたので、これが編序の妙處ぢや 「逢ふ事をは戀渡るといふに
かけてみるのぢや ながらの橋はながらへてといはん爲において、さて橋の
縁で戀渡るといふたので、逢事がないといふのではない ○ながらの橋のな
がらへ存命してどうぞ逢ひたいと願うて月日を送るまにいつかはや、年頃に

もサ成た事であるわい、

ともものり

うきながらけぬる沫ともなりなむ流れてとだに頼まれぬ身
は

「うきながらに、憂きながらをかけ 消ぬるに死ぬる意をよせ 流れてに存生
へてをかけたぢや ○うきながらに消え失せる水の上の沫のやうにありた
いものぢや ながれて、即ちながらへ存生して居たならば逢はれるとさへ頼
まれぬわいの此身は、

よみ人しらず

流れては妹背の山の中におつる吉野の川のよしや世の中

妹背の山は妹山背山をいふ 妹山は大和國 背山は紀伊國で 其中を流れ
て行くを、大和では吉野川といひ 紀路に入つては紀の川といふ 「流れては
は例のながらへてはをかけたぢや 妹背の山は夫婦によそへ 中におつる
吉野の川は何事によらず、すべて夫婦の間の隔となる事柄をいふ 「よしや

は全くそれをよしとして甘んずるではない、世の中のならひで、又せん方もないから、據なくそれに従ふ外はないといふので、しかたがないといふ意ぢや、それをよしの川のよしに重ねていうたぢや。○流れては即ちながらへて、月日を経て行くうちには、妹と背の相並びて居る山の間、吉野川といふ川が落ちきて、隔てをするといふ事をまぬかれない、ア、せんかたのない世の中、ありさまぢや、といふので、世といふ事は男女の間、いふといふ事は前にも申しておいたが、此の中も男女の上についていふ事ぢや、偕此歌は序文に「よしの川を引きて世の中を恨みきつる」とあるもので、歌がらが古く、ころおほらか、調が高い、凡そ男女の間には常に妨がおこりやすく、思ふやうにいかぬもので、是戀歌のおこる所以である、此歌は其大體を諷詠した物ぢや、から、之を戀歌の結尾としたので、編序に意を用ひたさまが見えるのぢや、

古今和歌集卷十五終

古今和歌集卷第十六

哀傷歌

いもうとの身まかりける時によみける

小野、たかむらの朝臣

なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなば歸りくるがに

わたり河は三途川の事、みつせ川ともいふ、「がに」は俗に「テモアラウカラニ」といふ意で、「歸りくるがに」は「歸り来る」でもあらうからに「ぢや」これも委くは皇國文法釋義にいうておいた。○「わしが悲んで泣く涙は雨とふるやうになるがよい」さらば三途の川が水が増すであらうから、妹が渡られなくて歸りくるでもあらうからに「といふのぢや」

さきのおほきおほいまうちぎみを白川のあたりにおくりける夜よめる
そせい法師

「さきのおほきおほいまうちぎみ」前太政大臣といふこと、藤原良房公の事、お

くりける夜は葬送の夜ぢや

ちの涙おちてぞたぎつ白川は君がよまでの名にこそありけれ

「血の涙は哀の甚しいをいふ 自身をはじめ諸人をかねていふ たぎつはた

ぎり流るゝをいふ ○君が薨去を惜み悲しむ世間の人の血の涙が落合うて

サたぎり流れる事ぢや されば此川を白川といふは君が御在世中までの名

でサあつた事ぢやわい今は赤い川ぢやから

ほりかはのおほきおほいまうち君みまかりにける時にふか

くさの山にをさめてける後によみける

空蟬はからを見つゝもなぐさめつ深草の山けぶりだにたて

「うつせみとはもと現身といふことで現存の身 即ち生きて居る身といふこ

とぢやが後に蟬のぬけがらの事にいふことゝなつたのでこゝにいふもぬ

けの蟬の事ぢや ながさめつは唯其なごりとみるをいふまでで軽くみるぢ

僧都勝延

堀川關白太政大臣基經公深草山に葬送ぢや

や心を慰むるといふではない 此歌の下の句六帖遍昭集等には烟だにたて

深草の山とありて其方がよいと古人もいはれてある○もぬけの蟬の蛻はそ

れを見てなごりともする事であるに人はなきがらをさへ焼てしまふからな

ごりをとゞめぬせめてあの深草の山よ火葬の烟だけでも立ちのこりてをれ

かしそれをでもなごりとみて慰めようものを

かむつけのみねを

深草の野邊の櫻し心あらばことしばかりは墨染にさけ

基經公の薨去は正月なれば詞書に依るに此歌は其御墓詣などの時櫻の咲き

はじめたるをみてよんだものぢやらうと古人もいはれた 御墓詣の人々い

づれも鈍色即ち墨染の袖にやつれて居る中に櫻の花やかに咲きはじめたる

を見てよんだものとみえる ○此深草の野邊の櫻花がサもし心がある事な

らば例年のやうに花やかに咲かないで今年のみは墨染の色に咲くやうにせ

よ

藤原敏行朝臣の身まかりにける時によみてかの家につかは

古今集詳解 哀 巻之十六

四五九

きのともものり

しける
寝ても見ゆねても見えけり大かたはうつせみのよぞ夢にはありける

二句ねでも見えけりは、敏行朝臣の死を現實の事とせないので、どこまでも夢としていふので、それ故大かたはうつせみのよが夢ぢやといひおろしたのぢや
○(夢)といふものは、寐ても見えるものぢやが、しかしねないでも又見えるものぢやわい(ハテこれが現實の事であらうかい)總體人の世の事はサ夢であるわ
あひしれる人のみまかりにければよめる

きのつらゆき

夢とこそいふべかりけれ世の中にうつゝある物と思ひけるかな

三句六帖に「よの中を」とあり、其方まさる由古人いはれた、その通りぢや ○夢とサいふべき事であつたわい さるに此世の中をば、現實の物ぢやと今日ま

では思うて居たことぢやわい(ア、合點のちがうたことよ)

あひしれりける人の身まかりにける時によめる

みふのたゞみね

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をもうつゝとは見ず

眠つて居る間に見るものばかりを夢といはうかいすべて此無常なる世の中の有さまをも、現實のものとは思はれない、

あねのみまかりにける時よめる

瀬をせけば淵となりてもよどみけり別をとむるしがらみぞなき

○(流れゆく水をと)いめんには、柵をかけて瀬をせきとめれば淵となつて水は淀むものぢやわい されども死んでゆく人をと、いめる柵のやうなものがサないからせんかたがない、

藤原たゞふさが昔あひしりて侍りける人のみまかりにける

時にとぶらひに遣はすとてよめる

閑院

さきだゝぬくいのやちたび悲しきは流るゝ水のかへりこぬな

是は後悔不立前 流水不還源といふ古語によつてよんだものといふ説がよ
ろしい されど解釋は諸注いづれも要領を得ぬ 此歌は詞書によく照し合
せて考へてみねばならぬ 是は詞書にある如く忠房が前方契を結んだ女の
死去した時忠房のところへ弔問のために詠んでおくつたもので歌に依て思
ふに是は一旦中か絶えたが、さる由が有て復び縁をつながらとする事が有て、
其事かまだとゝのはぬうちちに死去したものと思はれる 閑院はそれらの事
に關係した人らしくみえる さてさきたゝぬくいとは存生中速に其の事を
なし遂げざりしをいふ かくみればよく聞える歌ぢや 流るゝ水のはかの
古語の詞を枕詞としたぢや ○かの事をなし遂げざりし後悔の八千度くり
かへしても悲しく思はれるは流れゆく水の如くふたゝびかへりこぬ人の事

である。

紀友則が身まかりにける時よめる

つらゆき

あすしらぬ我身と思へどくれぬまのけふは人こそ悲しかりけ

れ ○明日をもしらぬ我身ぢやといふことはもとより知つて居れども日が暮れ
ぬまの今日の程は人の死がサ悲しう思はれるわい、

たゞみね

時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを

○時節もあるに、此秋の時分人が死にわかれをするといふことがあらうもの
か 何事もなく生きて居るを見るでさへも戀しくなつかしいものぢやのを、
はゝがおもひにてよめる 凡河内みつね
おもひは忌中といふことぢや

かみな月時雨にぬるゝもみぢ葉はたゞわび人の袂なりけり

「わび人は愁のある人即ち忌にこもる自身をいふ。○十月の時雨の雨にぬれたる紅葉の葉の色は唯さながら愁あるわび人の血の涙に濡れそぼちたる袂と同じであるわい、

ちゝが思ひにてよめる

たゞみね

ふぢ衣はつるゝ糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける

藤衣は喪服 喪服とは喪中着用する衣服ぢや 委しくは落窪物語大成四の十四頁に申しておいた「はつるゝは、織り糸のはつれること 喪服は端を縫はぬものぢやから、はつれやすい 其はつれた糸へ涙がかゝつたのが玉を糸に通したものに立ってたぢや ○喪服の破れはつれる糸は愁に沈みて居るわび人の涙をぬき通す玉の緒糸とサなる事であるわい、
おもひに侍りけるとしの秋山てらへまかりける道にてよめる

つらゆき

朝露のおくての山田かりそめにうきよの中を思ひける哉。

山寺へ参詣する途中の景物を以て序とした歌ぢや 朝露の置くといふをおくての山田とかけ さて山田の稻を刈初めといふを苟且とかけたので、苟且は深く心もとめず、等閑に思ひなす意 斯くまで無常たのみがたき世の中なるを、今までは心もとめず、等閑に思ひなしたりと歎じたのぢや○あれあのやうに朝露がおき渡してある晩稻の山田の稻は、今まさに刈初める事ぢや、そのかりそめといふやうに深く心もとめず、等閑に今日までは此人の世の中を思うて居た事であつたわいなア、かく無常なるものとは思はないで、五の句普通本には思ひぬるかな 打聴には思ひつるかなとあり、今は正義に従ふ、
思ひに侍りける人をとふらひにまかりてよめる

たゞみね

墨染の君がたもとは雲なれやたえず涙の雨とのみふる

墨染の袂は鈍色の衣といふこと即ち喪服ぢや ○墨染即ち鈍色の君が袖は雲であることぢやかして絶えまもなく涙が一向に雨のやうにばかり降る事である、

めのおやの思ひにて山寺に侍りけるをある人のとふらひつ
かはせりければかへり事によめる
よみ人しらず

足引の山べに今はすみ染の衣の袖のひるときもなし

墨染の衣は鈍色の衣で喪服なる事前に申した通りぢや
つてかやうなる山に今日は住居して居ますれば墨染にやつれたる喪服の袖
はちよつとの間もひるといふ事はなく始終涙でぬれてばかり居ます、
諒闇のとし池のほとりの花を見てよめる

たかむらの朝臣

諒闇とは天子の喪にいふ 履中紀に「モノオモヒと訓じてある 此は嘉
祥三年三月仁明天皇崩御の年の事ぢやらうとの舊説ぢや、

水なの面にしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるか

初二の句は實景に依てさやかにもといふ序としたのぢや さて序の縁語で
「みかげ」といふたぢや 「しづく」は物の水の中に見えるをいふ詞 水底にある

と水にうつると共にいふ詞ぢや さて此花とあるを仁明の崩御は三月廿一
日なれば櫻ではなく他木の花ぢやらうといふ説もあるが詞書のさまなどで
も櫻のやうに思はれる 四月に入りてさく花もないでないから櫻としても
さしつかへはないが、しかしそれはどうみてもよい「君がみかげ」は君が御係
といふことぢや ○岸の花が水面にありくと見える其花の色のやうに、い
かにもさやかにマア君が御係の今も目の前に見るやうに思はれる事かいナ、
(ア、おなごりをしり)

深草のみかどの御國忌の日よめる

文屋、やすひで

これも仁明天皇ぢや崩御の翌年の御忌日よんだのぢや、

草深き霞のたに、影かくしてゐる日のくれしけふにやはあらぬ
天皇の尊骸は、深草山に納め奉り、又三月の事ぢやから、草深き霞の谷に影かく
しというたぢや「照る日のくれしは崩御の事」「霞の谷」といひ影かくしとい
ふ句をうけていふ これを夕日のなりてくるゝに非ず日の俄にかさくるゝ

ちやなどいふはよくない 唯崩御ましくたるをいふのみちや 「けふにやはわらぬは今日ではないか即今日ちや」といふこと ○草の深い霞の谷に影をかくして世上を照らしたる日のかきくれたる日は即ち去年の今日にはあらずや去年の今日であつた早く一年となりし事よ

深草のみかどの御時に藏人頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒闇になりにつればさらに世にもまじらずしてひえの山にのぼりてかしらおろしてけりその又のとしみな人御ぶくぬぎであるはかうぶりたまはりなどよるこびけるをきよてよめる

僧正遍昭

藏人頭は主上の御側にあつて親しく内外の事を承る樞要の職ちや かしらおろすとは出家入道する事 皆人御ぶくぬぐとは喪服を脱ぐことちや、みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よかわきだにせよ
「みな人は官職に在つて先帝につかうまつりたる人をさす 花の衣は喪服を脱いで花やかな衣服となること 昔の袂は羅薛衣で、こゝでは僧衣の事に

いふ、○人々は何れも皆喪服を脱ぎすて、花やかな衣服となつてしまつた事ちや わしはもとより此墨染の袖を脱ぐべきではないけれど、せめて涙でぬれる事がなく、かわきなりとすればよいに、それさへ叶はぬ事よ

河原のおほいまうちぎみのみまかりての秋かの家のあたりをまかりけるに紅葉の色まだ深くもならざりけるを見てかの家によみていれたりける

近院右のおほいまうちぎみ

河原大臣は源融公ちや

うちつけにさびしくもあるか紅葉ばもぬしなき宿は色なかりけり

「うちつけにはさしわたり急にといふやうなる意の副詞 今「ブツケニ」といふ詞は即ち此うちつけにの轉訛で即ち「ブツケニ」ちや 「あるか」はあるかなでさびしくもみえる事である哉の意ちや ○うちつけに俄然物淋しくマア見える事であるかいナア紅葉ばまでも是までの主人がなくなつた家は色もない

つらゆき

事であるわい、

藤原たかつねの朝臣のみまかりての又のとしの夏郭公の鳴
きけるをきよてよめる

つらゆき

郭公けさなく聲におどろけば君に別れし時にぞありける

おどろくといふ詞此時代にはそれに氣を向けるやうのことにもいうたもの
で、このは今いふビックリする意ではない 人を訪ふ事を某をおどろかす
といふも其人を訪うて我に氣を向はしめるをいふのぢや このは郭公の聲
をさくにつけて氣を向けるのぢや さて郭公は冥土に通ふよしにいひ來つ
て萬葉にも郭公なく聲とになき人おもほゆなどもみえてをる 故にこの
歌もそれらの意から君に別れし時にぞありけるといふのぢや ○郭公が今
朝鳴き渡る聲を聞いて氣を向けて思へば 丁度去年君に別れた時となつた
事でサあるわい(サ、テ)はかなく立つ年月である

櫻をうゑてありけるにやうやく花さきぬべき時にかのうゑ
ける人身まかりにければその花をみてよめる

きのもちゆき

櫻を植ゑてありけるには茂行の家になや(望行)とかいた本があるは誤ぢや
やうやくはこれからそろくといふことかの植ゑける人は其主人即ち茂行
をいふ、

花よりも人こそあだになりにつれをさきに戀ひむとか
見し

「あだは、もろくかはりやすい意 戀ひむとか見しは戀ひ惜しまむと思ひしで
いづれをさきに云々は花のちるを戀ひ惜しまむと思ひしに人を花よりさき
に戀ひ惜まむとは思はざりしとぢや ○花はあだなるものぢやが其花より
もさらに人がサもろくかはりやすいあだなるものではあるわい 花と人と、
どちらを最初に戀ひ惜しまむと思つた 花をこそ戀ひ惜しまむと思つた人
をとば思はざつたものを」

あるじみまかりにける人の家の梅花をみてよめる

つらゆき

色も香も昔のこさに匂へどもうゑけむ人の影ぞこひしき

是は紅梅と見える色の濃いとあるからちや。さて此歌は上下のかけ合せで、色香とも昔通りぢやけれども何となくさびしく思はれるといふやうの餘情を生ずるぢや。○此花の色のこさといひ香のこさといひ昔のまゝに咲匂ふけれども(猶何となくさびしく思はれる)あゝ此花をうゑてながめた主人の影がサ戀しい(主人が居たならば共に賞翫せやうものを)河原の左のおほいまうち君のみまかりて後かの家にまかりてありけるにしほがまといふところのさまをつくれりけるをみてよめる

融の左大臣河原院の第宅に鹽釜浦のさまをうつして池をほり水をたへへこれに潮を毎月三十石づゝ入れて鹽を焼かしめ又池中には魚貝をすましめたといふ事顯注に見えて居る、

君まさでけふりたえにし鹽釜のうらさびしくも見え渡る哉

「うらさびし」のうらはうらかなし「うらなつかし」などのうらと同じで何となく

ものさびしい意。それを鹽釜の浦といふにかけていうたぢや。左大臣在世中は、此庭園で日々鹽を焼かせたが葬去の後は其事なき故烟が絶えたのぢや。○君が御いでがなくて烟が絶えてしまつた河原院の鹽釜の浦は何となくさびしく物足らぬやうに見え渡ることであるかいナア、

ふちはらのとしもとの朝臣の右近中將にてすみ侍りけるさうしの身まかりて後人もすまずなりにけるに秋の夜ふけて物よりまうできけるついでに見入れればもとありしぜんざいいとしげくあれたりけるを見てはやくそこに侍りければむかしをおもひやりてよみける

みはらのありすけ

利基朝臣が右近中將の時住居せられた曹司即ち部屋が死去の後誰も住居せず成て居て、前裁即ち庭園が荒れはてたのぢや、そこへ外から來たついでに立入て見たのぢや

君がうゑし一村すゝき蟲のねのしげき野べともなりにけるか

一むらは一群で、一株群がりたる薄ぢや、蟲のねのは、其眼下の景物をもてや
 がてしげきの枕詞としたもので、一群の薄がおひはびこり、一面に薄原の野
 となりて蟲のねしげく聞ゆるさまを枕詞としておもしろくいひなしたのぢ
 や、○君が御在世中植ゑおかれし只一群の薄は一面に生ひ蕃り蟲の聲々な
 きしきりふみ分られぬ野べとまでマアなつてしまつた事かいナア、さてく
 あはれなこと

これたかのみこのちよの侍りけむ時によめりけむ歌どもと
 こひければかきておくりけるおくによみてかけりける

とも のり

友則の父の在世中によみおきし歌見せよと惟喬親王のこひたまひたるのぢ
 や

ことならば言の葉さへもきえなむみれば涙のたきまさりけ
 り

ことならば「はいつその事に」といふ意といふは春の部でいうておいた「言の
 葉さへも消えなむは父と共に言の葉までも消えよとぢや、○いつその事に
 この言の葉までも父と共に消え失せてしまへばよい、今かく残つてあるを見
 れば涙の流がおちまさるわい、

題しらず

よみびとしらず

なき人の宿にかよは、郭公かけてねにのみなくとつげなむ

郭公は冥土にかよふ鳥といはれて居る事は、前にいうた通りぢや、なき人の
 宿は即ち冥土の事、宿は今ある場所といふ意ぢや、かけては、それに思ひを
 かけてぢや、○死去した人の居場所に通ふ事ならば郭公よ、わしは常にそれ
 に思ひをかけて、ねにばかりなきて戀ひ慕ひをるとつげてくれよ、

誰みよと花さけるらむ白雲の立つ野と早くなりやしものを

是は其人死して住宅も荒れはてもしくは取拂ひなどして野原のさまとなり
 たるに、櫻ばかりが昔かはらず咲きたるを見てよんだものらしい、三四句白
 雲のたつ野と早くなりやしといふさまどうもさやうに思はれる、誰一人立

よる人もなき屋敷跡に櫻の花が白々とさきたるを遠く望みたる野末に雲のたてるが如きをみていへるならん、○誰に見よとてあの櫻花は咲いた事であらう、其家は只白雲が立なびく野原といつかとくになりはて、たれ一人立よる人もないものを、

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるをいくばくもあらで女みこのみまかりにける時にかのみこのすみける帳のかたびらのひもにふみをゆひつけたりけるをとりて見れば昔の手にて此歌をなむかきつけたりける

「すみわたりは、そこに通ひ玉ひしこと 帳のかたびらは、御帳の帷子 其帷子の紐に歌を書つけた紙を結びつけたのぢや、昔の手は、閑院皇女の御筆といふことぢや、

かずくに我を忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ

下の句は山の霞を見るにつけて火葬の烟となつたる、我身の事を哀と思ひいでよとの事ぢや、○御親切にわたしの事を思しめしてお忘れのない事であ

るならば 山にたなびく霞を御覽ある時は茶碗の烟となつてしまふたわたしが事を哀とおぼしめして御覽あれかし、

をとこの人の國にまかりけるまに女にはかにやまひをしていとよわくなりける時よみおきてみまかりにける

よみ人しらす

人の國は他國といふこと 當時京よりして他國をさして人の國とはいふた事ぢや、

聲をだに聞かて別るゝたまよりもなきとこにねむ君ぞかなしき

君に逢ふことの叶はぬは勿論聲さへきく事ができで死にわかれをする、わたしの魂の悲しい事はいふ迄もないが、しかしそれよりも猶更に、わたしが死に去した跡へ歸り来て、わたしが居らぬ床にひとり淋しく寐なざるべき君が、一層おいとしい悲しい事ぢや、

やまひにわつらひ侍りける秋こゝちたのもしげなくおぼえ

ければよみて人のもとにつかはしける

大江、千里

紅葉ばを風にまかせてみるよりもはかなきものは命なりけり

○紅葉ばは風に從つてちるものぢやが、それを風に任せておいて見るよりも更にあふなくはかないのは、わしが今日の命でありますわい、かくいふまにも死ぬかしれませぬ

みまかりなむとてよめる

藤原、これもと

露をなどあだなる物と思ひけむ我身も草におかぬばかりを

露を平生何としてゝもろくはかないものぢやと思つた事で有たらう わしが身も草におくといふ事こそはないが露とすこしもかはりはなく、もろくはかないもので有つたものを、今消えるかもしれぬ
やまひしてよわくなりにはける時よめる

なりひらの朝臣

つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりし

を

○死といふことは誰も免れず終に一度は行く道ぞとはかねく、平生より承知して居たけれど、しかし昨日や今日其時節が来らうとは思はざつた事であるを、さてくといふので、人情の有のまゝを少しもためずかざらずさらくといひのべたるまことに人を感動する歌ぢや、これが歌の眞面目といふべきものである。

かひの國にあひしりて侍りける人とふらはむとてまかりける道なかにてにはかにやまひをしていまくとなりにつればよみて京にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍りける歌
ありはらのしげはる

いまくとなるとは危篤となること、人につけは人に托するぢや、

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今は限の門出なりけり

「かりそめは深く心をとめず、等閑に思ひなすこと、今は限は、此時代一聯の成語でもはやこれぎり」の意にも、又命の終ることにもいふ、秋下に今の限の色

と見れば 詞花集戀下今は限と思ふなりけりの類はもはやこれぎりの意
 命の終ることには源氏物語こゝかしこに見えて居る 此歌のはもはやこれ
 ぎりといふに死につく門出をかけたていうたものでゆきかひちといふに甲斐
 をかけたものぢや ○唯一と通り往つて復り来る甲斐の旅路ぢやと思ふ
 て來た事であつたが もはやこれぎり復らぬ死去の門出と成た事ぢやわい

四八〇

古今和歌集卷十六終

明治四十一年十月二日印刷
 明治四十一年十月四日發行

卷一 定價金四拾五錢
 卷二 定價金五拾五錢
 卷三 定價金五拾五錢
 卷四 定價金五拾五錢



著 作 者 中 邨 秋 香
 發 行 者 東 京 市 本 郷 駒 込 富 士 前 町 五 十 五 番 地
 前 川 又 三 郎
 東 京 市 京 橋 區 中 橋 廣 小 路 六 番 地
 印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 弓 町 二 十 四 番 地
 高 塚 慶 次
 東 京 市 京 橋 區 弓 町 二 十 四 番 地
 印 刷 所 三 協 印 刷 株 式 會 社

發 兌 元

東京市京橋區中橋廣小路六番地
 振替貯金口座四一〇九番

前川文榮閣
 電話本局五七七番

187
322

中 邨 秋 香 先 生 著 述 略 目 錄

書名	冊數	正價	書名	冊數	正價	書名	冊數	正價
落窪物語大成	四	一、八〇〇	中古文鑑	二	五〇〇	白川樂翁公	一	一、三〇〇
落窪物落講義	三	一、三〇〇	同 參考書	一	二、五〇〇	菅 公 傳	一	一、〇〇〇
校訂吉野拾遺詳解	一	二、五〇〇	文千草の錦	一	七〇〇	愛 國 唱 歌	一	〇、〇〇〇
古今集詳解	一	二、二五〇	書簡文大成	一	一、〇〇〇	同 參 考 書	一	〇、五〇〇
後撰集詳解	一	近刊	新書簡文法式	一	五〇〇	秋 香 集 短 歌	一	四、〇〇〇
皇國文法釋義	一	一、〇〇〇	新女子書簡文法式	一	六〇〇	秋 香 集 長 歌	一	近刊
皇 國 文 法	一	五〇〇	小野篁先生著 新編 書簡文例	一	六〇〇	秋 香 歌 か たり	一	五、〇〇〇
新體詩歌自在	一	一、〇〇〇	小野篁先生著 編 女子書簡文例	一	六〇〇			
故小中村清矩先生合著 改正增訂日用文鑑	二	五〇〇	小野篁先生著 新編 手 紙	一	四、五〇〇			
同 參 考 書	一	二、五〇〇	小野篁先生著 女子 文の手ほどき	一	四、五〇〇			